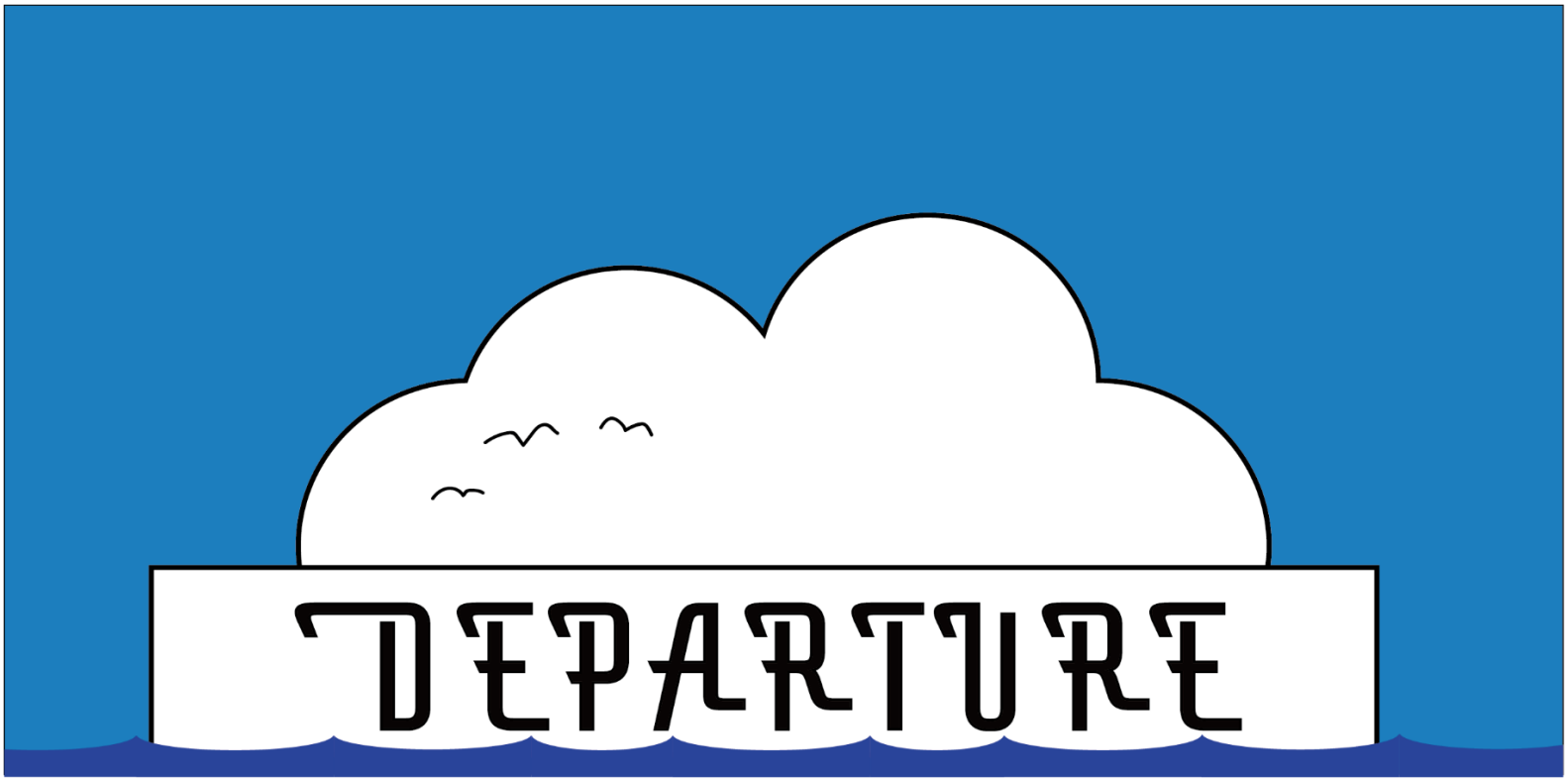


Japan Bridge for International/Governmental Organization

青山学院大学社会情報学部

J-BINGO プロジェクト

はじめに

世界は今、環境問題や堰を切ったように動き始めた国際情勢の変化など、多くの問題を抱えています。これらの問題は、もはや一国で解決できる規模にとどまらず、世界で団結して解決を目指していく必要があります。そこで、重要な役割を果たすのが、各国からの分担金によって成り立っている国際機関です。外務省発表のデータによると、2019 年の日本の国連への分担金はアメリカと中国に次ぐ 3 位の 238.8 万ドルであり、これは全体の 8.56%を占めています。その一方で、2019年時点での、国連関係機関の日本人職員数は882人で、これは全体の 2.41%にとどまっています。日本人職員の数は、増加傾向にありますが、他の G7 加盟国と比べた時に、日本はまだ十分ではありません。今後、世界における日本の存在を保っていくためには、更なる人的貢献が必要となります。

私自身も昨年度、このプロジェクトを通じて、国際連合工業開発機関（UNIDO）の東京事務所で、1 か月間のインターンシップを経験する機会がありました。学部生で国際機関のインターンシップができるということは、とても稀なことで、とても有意義な経験となりました。しかし、その一方で、実際に働いている職員の方と、自分の経歴の差を、感じずにはいられなかったという思いがあり、このことが学生が国際機関で仕事をすることに対して、イメージがわかない要因の 1 つではないかと考え、このパンフレットの作成を決めました。

本誌では、青山学院大学を卒業した OB・OG の方を対象にインタビューを実施し、その内容を掲載しました。内容は、今の仕事についてや学生時代についてなどをお聞きすることで、それぞれの仕事を身近に感じてもらうことを目標としました。また、将来、国際機関でインターンシップや就職することに向けたヒント、留学をするために利用できる、学内の国際センターについても掲載しています。

国際機関に限ることなく、「国際的に活躍する」ということを身近に感じてもらうことで、このギャップを解消し、社会情報学部の 1 人でも多くの学生のキャリアの可能性を広げられれば、との思いから作成しました。

社会情報部学部　2016 年度生

橋本光弘

目次

1.J-BINGO プロジェクト代表よりメッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2.J-BINGO プロジェクトについて・・・2
3.国際的に活躍する OB ・ OG へのインタビュー記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3-1. 鴨志田拓也氏（文学部／IMF）・・・6
3-2. 島根玲子氏（文学部／外務省）・・・10
3-3. 浜中慶氏（文学部／富士通クラウドテクノロジーズ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
3-4. 菱沼阿連氏（社会情報学部／アクセンチュア）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
3-5. 生田智暉氏（社会情報学部／慶応義塾大学大学院）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
4.国際機関で働くには・・・26
5.国際センターについて・・・30

J-BINGO プロジェク代表代表よりメッセージ

青山学院大学 社会情報学部
客員教授
菊川 人吾氏

京都大学卒業後、平成 6 年、通商産業省入省。平成12年、コロンビア大学へ留学、行政経営修士取得。平成15年、石川県商工労働部産業政策課長、その後、産業技術環境局環境政策課政策企画委員、大臣官房会計課政策企画委員、在ジュネーブ日本政府代表部参事官（日本人として初めて WTO・TBT 委員会議長に就任）、中小企業庁金融課長、経済再生大臣秘書官、中小企業庁財務課長を経て、現在、商務情報政策局情報産業課課長。

将来に可能性を秘めた学生の諸君へ

随分昔からグローバル化は言われており、グローバルに対応するといったセリフは既に「大前提」ということになっています。ビジネスの世界でも公共分野でもアカデミックの世界でも「活躍する」＝「世界で活躍する」ことと同義です。しかし、残念ながら、いわゆる国際機関というフィールドでは日本人の絶対的な数は少ないのが現状です。

J-BINGO プロジェクトは、2015年に「国際機関など国際的なフィールドで活躍できる学生を育成する」という理念で創立されました。その際の強い問題意識は、私自身がジュネーブに海外赴任していた際に肌で感じた、国際的な交渉やビジネス現場の組織における日本人職員の数が実態的に交渉そのものをも左右しているという現実でした。その現状を変える思いで創立させました。このプロジェクトではまず、「国際的に働くとはどういうことか」、「国際貢献とは何か」を学び、理解を深めます。そして、英文での履歴書作成や国際機関でのインターンシップを実際に経験することにより、早いタイミングから自分の将来的なキャリアプランを考えるということが迫られます。そうした活動を通じて、就職活動のみならず何年も後のキャリアプランも考えるきっかけとなります。

大学 4 年間という大きな可能性のあるフィールドを与えられた学生諸君がそのフィールドで何をするかは自由です。少しでも前に進もうという勇気を持つ学生諸君がJ－BINGOの扉をノックすることを待っています。

? J-BINGO プロジェクトとは

将来的に国際機関の日本人職員を増やすことが日本全体としての課題となっています。そのため、学生時代から実際に国際機関で働いている日本人職員との接触機会や、国際機関でのインターンシップ等の機会を設けることで、青山学院大学社会情報学部においても、国際機関職員候補となる人材を育成していくことが必要とされています。そこで、2015 年度より、社会情報学部の学生の国際機関に対する興味や関心を高めること、将来の就職先の1つとして、国際機関や諸機関を意識させることを通じ、最終的には、国際機関で働く日本人を増やすことを目的として設立されたのが、この J-BINGO（Japan Bridge for International Governmental Organization）プロジェクトです。

具体的な活動内容について

現在、社会情報学部の 4 学年それぞれで、J-BINGO プロジェクトと関連した活動が行われています。具体的な活動内容は、下表の通りで、1年次の講演会を通じて興味を持った学生が進級後も、J-BINGO プロジェクトを選択していくことで、より専門的に学習を進めるパターンが主流です。ただし、3 年次からでも参加したいという、やる気や意欲のある学生は積極的に受け入れています。

学年	活動内容
1 年次	1 年次必修科目「English Communication Ⅰ・Ⅱ」の授業内で、国連職員による国際機関での働き方や今までのキャリアについての講演会
2 年次	2 年生以上を対象とした科目「プロジェクト演習入門Ⅰ・Ⅱ」の選択テーマとして、「国際機関への更なる日本人輩出に向けた対策の提案」の実施
3 年次	3 年生以上を対象とした科目「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」の選択テーマとして、「在京国際機関へのインターンシップ」の実施
4 年次	「特定課題演習科目」で J-BINGO プロジェクトの内容に絡めた研究課題の実施

また、2 年次以降の活動では、2 週間に 1 度のペースで 2～4 年次の学生が集まり、共同で学習を進める合同セッションが実施されます。その際に、国際的にご活躍されている方をお招きし、現在の仕事や今までの経歴について、講演していただくことがあります。普段、なかなかお話を聞く機会のない方の貴重な講演になるので、自身の就職やその先のキャリアについて考える、非常に良い機会となります。

合同セッションでの講演（一部抜粋）

- 国境なき医師団　今城さん
- ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会　中田さん
- プロジェクトアブロード（海外ボランティア活動支援）　木村さん
- 日本貿易振興機構（JETRO）　斎藤さん

【1年次】英語授業内での過去の講演内容（一部抜粋）

- UN　Women　石川さん
  『一（イチ）国連職員のキャリア選択と結果』
- 国際連合工業開発機関（UNIDO）　村上さん
  『Inviting young talent to UNIDO』
- 国際連合児童基金（UNICEF）　大須さん
  『世界の子どもたちにふさわしい世界の実現を目指して
  -UNICEF で働く（Working with UNICEF for a world fit for children）』

【2年次】インタビュー調査について

2 年次は、授業で決められた各グループで、メンバー間で興味のある分野で活躍している国際機関の調査を行います。そして、その国際機関にアポイントメントを取り、実際に赴いて仕事の内容や、やりがいについてのインタビュー調査を行います。その後、調査結果をもとに次年度の目標である、インターンシップに向けたプログラムの提案を行います。

◇今までのヒアリング先（一部抜粋）

- 外務省
- 国際連合工業開発機関（UNIDO）
- 国連難民高等弁務官（UNHCR）

このプロジェクトでは、日頃から外部の方とのメールのやりとりが多く、メールのマナーについても学ぶことが出来ました！

プロジェクトメンバーの声

インターンシップ体験記

3 年次の J-BINGO プロジェクトでは、1 年間の内にで、在京国際機関でインターンシップを行うことが目標になります。30ページからのセクションで紹介している、英文履歴書とカバーレターを準備し、各国際機関へ送りました。最終的に、国際連合工業開発機関（UNIDO）からお声がけを頂き、インターンシップをさせていただくこととなりました。

UNIDO は、開発途上国への工業分野での支援を行うことで、経済発展と工業基盤の整備を目指す国際連合の専門機関で、1966 年に国連総会によって設立されました。東京事務所は、青山学院大学　青山キャンパスの向かい側にある、国連大学内に位置しています。

私は9月から10月の1ヶ月間、国際連合工業開発機関（UNIDO）の東京事務所にて、インターンシップを行いました。インターンシップの内容は、グローバルフェスタと呼ばれる一般向けの国際協力イベントで、「ブース出展の企画とその実施」というものでした。ブース出展では、PowerPoint を用いて、UNIDO の実績や活動内容について紹介するコンテンツの作成、職員の一日パネルの作成、来場者に配布するオリジナルハイチュウや、スタッフ用のタオルのデザインを考案しました。企画では、社会情報学部の強みである、情報分野を活かすことを意識して取り組みました。

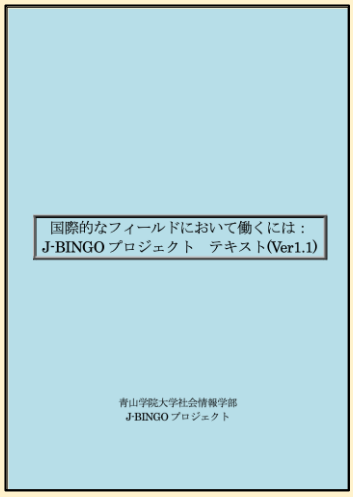
本来であれば、29・30 日の 2 日間の開催でしたが、台風接近の影響で、29 日のみの開催となってしまいました。その中でも訪れてくださった来場者の方に向けて、全力で UNIDO に関するご案内を行いました。最終的に 300 人以上の方にブースを訪れていただいて、UNIDO の認知度を高めることに成功しました。2 日目の中止は、予想もしない大きなハプニングでしたが、忘れられない思い出となりました。学部生が国際機関でインターンシップが出来ることはとても貴重なことで、本格的な就活が始まる前に、このインターンシップに参加できたことは、とても大きな自信となりました。

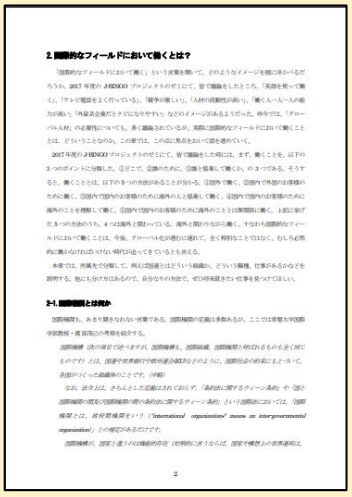
△実際に作成した紹介コンテンツ

△ブースで撮影した集合写真

J-BINGO プロジェクト　テキストのご案内

本誌よりも更に、細かく国際機関や国際機関での働き方等についてまとめたテキストが、プロジェクトの1期生により作成されました。
このパンフレットを読んで、「更に様々なキャリアについて知りたい」「このパンフレットの情報だけでは物足りない」という方に最適な1冊に仕上げられています。
テキストは、ウェブページにて公開しているので、ぜひチェックしてみて下さい。





J-BINGO プロジェクト　ウェブページのご案内

J-BINGO プロジェクトのウェブページが、プロジェクトの 2 期生により開設されました。
このパンフレットでは掲載していない、インタビュー記事等を公開しています。
また、今後の活動内容は、本ウェブページにて公開を予定しています。
その他の情報も発信していく予定なので、お見逃し無く！

詳細 ▹▹ http://www.cc.aoyama.ac.jp/~j-bingo/

QR コード

社会人になることは、1つの通過点にすぎません

国際通貨基金　アジア太平洋地域事務所
エコノミスト（財務省より出向中）
鴨志田　拓也さん
文学部　史学科卒業

IMF エコノミストという仕事について

国際通貨基金(以下 IMF)のエコノミストは、本部と地域・各国事務所とで役割が異なります。本部のエコノミストは、加盟国の経済発展や経済政策に関係する業務、金融政策・銀行セクターのモニタリングなど、マクロ経済全般の専門的な事柄に関する業務を行うほか、IMF の旗艦報告書である「世界経済見通し」の作成などに携わります。一方、私のような地域事務所などに所属するエコノミストは、担当国の経済動向の把握及び本部への報告、レポートの作成といった業務のほか、本部の職員を招いてのセミナーの実施や、学生向けの研修プログラムの運営業務等を行っています。エコノミストという肩書ながら分析業務ばかりではなく、実際は幅広い業務を行なっています。

今の仕事に興味を持ったきっかけ

私は現在、財務省から出向という形で、2017 年の 7 月より IMF のエコノミストとして仕事をしています。従って元々は財務省の職員ということになりますが、学生の頃から財務省を志望していたかと言うとそういうわけではなく、当時は漠然と公務員になることを目指していました。ただ公務員を目指す上で、「国際的な業務に携わる仕事」がしてみたいと思い、大学卒業後に 1 年間の公務員浪人を経て東京税関へ就職しました。東京税関入関後は成田空港で税関検査官として、旅客の手荷物検査などの業務を行っていました。

ちなみに税関は財務省の一組織であり、多くの税関職員が財務省に出向して勤務しているのですが、東京税関で仕事をしていく中で、「財務省

でこういった仕事もできる」といったことを税関の先輩などから知り、その業務内容に興味を持ちました。そして、税関入関から 4 年目に自ら希望して財務省に移りました。その後、財務省では国際局で勤務をしておりましたが、その中で大学院進学などの機会をいただきました。そして、2017 年に現在のポストの話をいただいて、今に至ります。

IMF で働くことの魅力

財務省の仕事と比べた時に、個人でできる仕事の幅が広い点が魅力だと思います。例えば、財務省では部署ごとに特定の政策分野にフォーカスした仕事が多いことに対して、国際機関である IMF では、個人にある程度の裁量を与えてくれます。自分がやりたいプロジェクトがあれば、手を挙げればそれをやらせていただける環境が整えられています。ただ、これは両機関で仕事のやり方がそれぞれ異なっているということで、決してどちらが良いということではありません。また、そうした違いはありますが、IMF は世界経済の安定を目標としており、財務省は日本の財政や経済の安定を図ることを目的としているので、究極的に目指している方向性は同じであると言えます。

学生の頃と比べて成長できた点

自分から発信していくという点が、大きく成長出来た点だと思います。学生の頃は、基本的に聞く側に徹していましたが、社会人になり、仕事をしていく中で、自分から発信していくことが求められるようになります。従って、学生時代の自分と比べると、今の自分は考え方や性格といった点でガラッと変わっているんじゃないか、と自分でも思います。

学生時代について

青山学院大学の文学部史学科に 1998 年に入学しました。専攻は西洋美術史です。学生時代はボランティア活動や大学でのサークル活動は特に行っておらず、もっぱら地元の友達とスポーツに励んでいた、至って普通の学生でした。英語についても、留学経験は特になく、特段大学の外で英語を頑張っていたわけでもありませんでしたが、大学の授業で与えられたものを一通りこなしていった結果、自然と力を伸ばすことが出来ました。また、法律や経済学、数学など、一般教養に関する授業を幅広く履修し、学んでおいたことは、仕事をしている今となって振り返ってみると、やっておいてよかったなと思います。

△かつての厚木キャンパスの食堂でクラスメイトとの写真。一番手前が鴨志田さん。

将来的な目標について

将来的な目標ではないかもしれませんが、その時その時の仕事に一生懸命取り組みたい、と思っています。私もだいぶ歳を取ってきていますが、いくつになっても人間は成長できるものだと思うので、今までできなかったこともできるよう、今後もいろいろな経験を積み重ねて、自分自身のキャリアを築いていきたいです。

財務省で働き始めた頃を振り返ってみると、文学部出身ということもあり、当初は経済などの知

識が不足しており、分からないことがたくさんありました。ただ、日々仕事をしていく中、勉強を続けていくことで、少しずつ自分ができることを増やしていきました。そうした努力を積み重ねていった結果、省内の制度で大学院にも進学させていただき、さらにスキルアップすることが出来ました。スタート地点は決して高いところではありませんでしたが、研鑽し続けてきたことで今の自分があると言えます。

国際機関への日本人輩出の課題

国際機関では何よりも即戦力が求められます。ですので、一般的な就職活動のように短い期間で取り組むのではなく、長いスパンで、すなわち民間企業や社会人大学などでまずはスキルや知識を身につけた上で、国際機関の職員を目指していただく――国際機関で働く日本人を増やしていくためにはそうしたことを念頭に、国や個人が取り組む必要があると考えます。

また IMF に限れば、IMF で働く上で最も必要とされる知識が修士・博士レベルのマクロ経済学である一方、日本でマクロ経済学を主専攻にする人が比較的少ないという点に、日本人職員を輩出する上での一つの課題があると考えます。日本国内でマクロ経済学の知識を直接活かすことができる仕事が官公庁や日本銀行などに限られてしまうため、将来的な就職の間口が狭いということが理由の一つです。実際、ミクロ経済学の方が一般企業で活用できる場面が多いという事実があります。

そうした中、私たち IMF の日本の事務所では、日本独自のプロジェクトとして、2017 年より、学生の方を中心に IMF で実際に使われている経済分析の手法を一泊二日で教えるセミナーを年2・3回実施しています。このセミナーを通じて、学生の方に IMF について知っていただき、将来的に IMF で働くことを一つの選択肢として考えていただくことを目標としています。また IMF においても、日本人職員数を日本の IMF への出資額に見合う水準まで引き上げることが望まれています。

もしも学生時代に戻れるなら

ありがちな回答かもしれませんが、勉強をもっとしたいと思います。学生時代の４年間という時間はとても貴重な時間です。いろいろな選択肢がある中で、今だからできることをやっておいて損はないはずです。

△セミナーでのスピーチ時の写真

人生の分岐点について

高校卒業後、私は一度理系の学部へ進学しました。しかし、そこで学習していく中で、自分は理系には向いていない、と思うようになりました。このまま今の場所で勉強を続けて社会人になるか、もしくは思い切って文系の学部を受験し直すかを悩みましたが、最終的には入学してから半年通った後にその大学を退学し、翌春に青山学院大学を受験し、入学しました。私にとっては思い切った決断でしたが、これは私の今の人生に大きな影響を与えるものだと思います。

ただ、一度理系の大学に進学をした経験は決

して無駄なものではないと思っています。実際に受験科目として数学などを学習したことや、短い期間でしたが入学後にも学習したことで培えた論理的な考え方は、今も仕事をする上で役に立っています。

△ラガルド前専務理事と鴨志田さん

青学生としての強み

「青学生として」ではないかもしれませんが、他の大学にある「イズム」のようなしがらみにとらわれること無く、色々なところへ入っていけることは大きな強みになるのではないのでしょうか。また、個々人の学習のベースは一定水準以上あるはずですので、そこから発展させていくことができることは強みだと思います。ただ、社会人になることがゴールではなく、そこから上を目指していくにはどうしていくかを考えていくことが大切です。

学生に向けて

国際機関で働くことは学生の皆さんにとって今はあまり身近なことではないかと思います。しかし、社会に出てからも様々な道筋が存在します。いつまでも成長できるということ、そしてその先にある1つの選択肢として国際機関が存在するということを覚えておいてほしいです。始めにも述べましたが、大学時代に幅広く学習を進めてきたことはよかったと思います。そうした意味で、社会情報学部の特徴の1つである、幅広い教養を身につけるというカリキュラムは、後々社会人になってからもきっと活きてくるのではないのでしょうか。

■鴨志田拓也さん　PROFILE

文学部史学科を 2002 年に卒業。学部時代の専攻は西洋美術史。2003 年より東京税関に勤務。成田空港にて税関検査官を務める。財務省異動後は国際局に在籍し、主に日本が保有する外貨準備の運用などを担当。在職中に省内制度を利用して一橋大学国際・公共政策大学院の社会人コースへ進学し、公共政策について学ぶ。その後、大学院で学んだ知識を元に 2017 年より IMF へ出向中。

■国際通貨基金（IMF）について

IMF（International Monetary Fund）は、1947 年に業務を開始した国際機関。2019 年 9 月末時点の加盟国は 189 カ国。主な目的は、加盟国の経済・為替政策の監視（サーベイランス）や、国際収支が著しく悪化した加盟国に対して融資を実施することなどを通じて、（1）国際貿易の促進、（2）加盟国の高水準の雇用と国民所得の増大、（3）為替の安定、などに寄与することとなっている。主な会合には、年 1 回秋に開催される年次総会と呼ばれる世界銀行と合同の総務会、原則年 2 回開催される国際通貨金融委員会（IMFC、International Monetary and Financial Committee）などがあり、日本からは総務として財務大臣が、総務代理として日本銀行からも総裁が出席している。

恋愛でも趣味でも、4 年間でこれは頑張ったと言える何かを

外務省
アジア大洋州局地域政策参事官室
島根 玲子さん
文学部 英米文学科卒

現在の仕事について

外務省のアジア地域全般の総合的な外交政策を担当する、アジア大洋州局の地域政策参事官室という部署に所属しています。その中でも私は、近隣諸国（日・中・韓）の問題と、歴史問題（慰安婦問題など）をメインに取り扱っています。

これらのテーマは今日、特に世間から注目を集めているだけに、日々緊張感を持って業務に取り組んでいます。国の命運を背負って行っているという意識で、諸外国とやりとりを行うため、ここで引き下がってもいいか、という気持ちは一切ありません。楽な仕事ではありませんが、自分の行っている業務が次の日の新聞の記事になることもあり、それだけ社会にインパクトを与えていることに、とてもやりがいと面白みを感じています。

また、日常のニュースや世界の動きを自分のこととして捉えられるのは、この仕事ならではの点だと思います。

今の仕事に興味を持ったきっかけ

大学生の時に友だちとフィリピンのセブ島に訪れた際に見たストレートチルドレン（様々な理由により、路上生活や労働をせざるを得ない子どもたちのこと）の存在を知った時は、私にとって衝撃的な経験で、「この子たちのために、先進国に住む私には何ができるだろう」という思いを持つきっかけとなりました。

しかしながら、大学 4 年生の就職活動の時期になった時にまだ将来何がやりたいということを考えることができず、志望動機も固まること

なく、就職活動も軒並みうまくいきませんでした。その中でも海外に携わりたいという思いと漠然とながらも、国連職員への興味が湧いたことで、ロースクールへの進学を決意しました。

大学院進学後は、NGO でボランティア活動を行うなど、自分なりに将来について考え始めるようになりました。悩みに悩んだ結果、生まれ育った日本の支えとなりたい、という気持ちが何よりも強かったので、外務省で働く決心をしました。

学生の頃と比べて成長できた点

今の仕事を通じて、私は 3 つの点で成長できたと感じています。語学力と勉強に励む能力、物事に対しておおらかに構える姿勢です。語学力は、社会人になるまで一切留学経験がなかった私ですが、外務省に入省するとそれぞれ指定された国へ、2 年間語学留学をすることになります。私の場合は、スペインへ派遣され、スペイン語を勉強しました。今では、英語よりも得意かもしれません。

社会人になり、仕事を始めてからはとにかく日々勉強を続けてきました。昨年、本を執筆した時は、日中は仕事をこなし、仕事が終わり家に帰った後も、本を書くための勉強の繰り返しました。思い返すと大変な日々でしたが、知識を更に蓄えることで、仕事に通じる形で成長できたと思います。

物事に対する姿勢への変化についても、スペイン留学での経験が大きいです。これは仕方がないことなのですが、日本に住んでいたときは、小さなことを気にして、くよくよしたりしていました。しかし、スペインではもっとおおらかに構えられるようになり、小さなことは気にしないようになりました。このような物事に対する向き合い方の変化ができたのは、留学をしたからこそのことです。

学生時代について

私は、高校時代に真面目に学校に通わず、夜更けまで遊んでいた、いわゆる“コギャル”でした。そのことで 2 回留年し、高校中退を経験しています。その後、一念発起して大検（大学入学検定試験）を取得して、文学部英米文学科に入学しました。

そのこともあって、大学に入学してからは勉強の取り組み方がわからず、授業時間の 90 分間着席して、先生の話を聞くだけでも当時は一苦労でした。

そんな学生時代の当時の思い出として、友だちといった海外旅行は、外に目を向けるきっかけとして大きかったように思います。学生時代に 20 カ国ほど旅行しましたが、留学経験が全く無かった私は、世界について何も知らなかっただけに、スポンジのように見たものや感じたことを吸収することができました。

△院生時代に訪れたケニアでのボランティアの写真

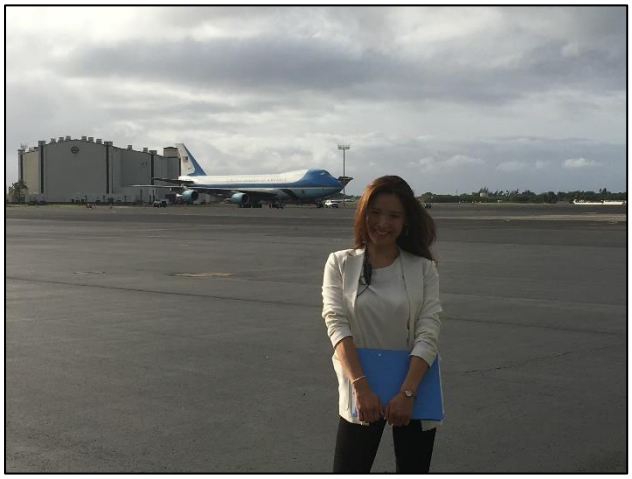
将来的に実現したいこと

外務省でまだ 8 年しか勤務経験がないので、まだまだ模索の段階ですが、言うまでもなく外務省には優秀な外交官が沢山在籍しています。

その中でも、自分にしか持っていないユニークなものは、このイレギュラーな経歴だと考えています。

最近、高校へお邪魔して自分の仕事や経歴についての授業を行う機会をいただくのですが、ちょっとユニークな経歴を持った自分の話だからこそ聞く耳を持ってくれる高校生がいます。「あなた達の年代の頃、私は学校に真面目に通わず・・・」という話をすると、驚く反応をしてくれます。その話を聞いた生徒が「私も英語をもっと話せるようになろうかな、とか海外に出てみようかな」と、思ってくれたら嬉しく思います。

これからも、この私のバックグラウンドを活かしたことをどんどんやっていきたいと考えています。



△ハワイ出張時の写真(エアフォース・ワンを背景に)

留学経験について

私は外務省入省後のスペイン留学が初めての経験で、それまでは一切ありませんでした。学生の皆さんから、「外務省に入る人は留学経験がある人が多いのですか？」という声をいただきますが、決してそんなことはないと思います。ただ、外務省に関しては入省後に全員が海外留学することになり、それぞれが留学先の言語を学ぶことになります。

これは外務省に限った話ではなく、学生時代に留学を経験していないことは、全く気にする必要はないと思います。社会人になってからでも、その機会の用意されているケース（海外トレーニー制度など）が増えてきているからです。その中で何よりも大切なのは、新しいことを自分から学ぼうという意欲を常に持ち続けることだと思います。

もし学生時代に戻れるとしたら？

何事に対しても、もっと問題意識を持って取り組んだように思います。今思い返すと、私は学部生時代の 4 年間という貴重な時間をただ漠然と過ごしていたように思います。特に、就職活動を始める、大学 4 年生のタイミングで何かしら誇りを持てるものを作っておくことが、大切です。その内容は人によってはアルバイトかもしれませんし、大学生になってから始めた趣味かもしれません。その点でいうと、私の場合は旅行が問題意識を持つ機会となりましたが、自分なりに、1 つ軸を持っておけるとより実りのあるものになったのではないかと思います。

ご自身で思う人生の分岐点

これは、コギャル時代に戻るのですが、ある日夜通しで遊び呆けて朝帰りした時に TV で流れていた、日本昔ばなしの主題歌である「にんげんっていいな」の曲を聞いた瞬間です。

高校に真面目に通うことなく、日々遊び倒していた一方で、「このままでいいのかな」という気持ちは常に抱いていました。家に帰ると、いつもご飯を食べるかもしれない私のためにお母さんが夕飯を用意してくれていました。食べなかった分は、母親が朝食としてそれらを食べていて私の中でも申し訳無い気持ちで一杯でした。

その葛藤の末に聞いた、「おいしいおやつにほかほかごはん　こどもの　かえりを　まってるだろな」という歌詞に、私の母親が重なり自然と涙が溢れ出し、このままではいけないと目を覚ますことができました。その次の日から予備校へ通い始め、大学検定を取得、大学受験を行いました。振り返ってみると、この瞬間が私の人生の中でも、大きな分岐点だったように思います。

青学生としての強みについて

難しい質問ですが、“青学生”としての強みは、いい意味で無いと言っていいと思います。社会に出てしまえば、出身大学で物事が決まることがあまりないからです。

学生の皆さんから就職活動に関する相談を受けることがありますが、多くの学生が学部で勉強したことや今まで経験したことなど「今自分が持っているもの」ばかりに着目します。ですが、大事なことは「これからどう成長していくか」です。いま自分がいる足元ばかりに目を向けず、これからの自分の伸びしろに目を向けてください。

学生へのメッセージ

大学生活の 4 年間をどのように過ごすかは、皆さん人それぞれだと思います。ただし、就職活動やどこかのタイミングで「あなたの 4 年間はなんだったのですか」と問われるタイミングが必ずやってきます。その時に、胸を張って言える何かを作っておくことが大切だと思います。

また、就職活動を行う上で、自分の足元ばかり見ていてはいけません。なぜならば、企業はあなたの今までの二十数年以上に、これからの数十年に価値を求めているからです。今までの経験に価値を置くのではなく、これから先の未来に価値をおいて、自分を売り出していくことが大切です。

■島根玲子さん　PROFILE

青山学院大学文学部英米文学科に進学。早稲田大学法科大学院を経て 2010 年司法試験合格。2011 年外務省入省。経済局、中南米局等を経て、現在アジア大洋州局所属。

■島根玲子さんの著書

『高校チュータイ外交官のイチからわかる！国際情勢』（扶桑社）

移民・難民、エネルギーなど世界が抱える様々な問題をわかりやすく解説。

ISBN　978-4594080204

■外務省（ＭＯＦＡ）について

1869 年設置された日本の行政機関の一つ。日本の国益を守ることを目的として、外交政策・通商航海・経済協力・条約締結など対外行政事務や外国政府との交渉、情報収集発信などを取り扱う。

国外に在外公館を有し、日本人渡航者の保護なども行う。

まずは、自分の将来を見据えることからはじめてみてください

富士通クラウドテクノロジーズ株式会社
クラウドインフラ本部 副本部長
インフラデザイン部 部長

浜中 慶さん

文学部　心理学科卒

現在の仕事について

富士通クラウドテクノロジーズという企業で、クラウドコンピューティング、ＡＩの分析・開発を行っています。現在は、クラウドインフラ本部という部門で、副本部長としてクラウドサービスの事業企画、約１００人いるメンバーの取りまとめ、アライアンス業務と呼ばれる、私たちのパートナーである企業様との提携窓口の統括のを担当しています。

クラウドサービスは今日、一般化しており様々なものの裏側に私達が開発しているクラウドサービスが存在しています。昔は規模の大きい企業でないと、莫大な IT リソースを取り扱うことは、難しいという課題が有りましたが、クラウドサービスの登場により企業が必要としている時に、我々が必要分の IT リソースを提供することが可能となりました。このクラウド事業を通して、様々なお客様の課題解決のお手伝いをすることが我々のミッションです。

今の仕事の魅力について

私は、自分たちの手で新しいサービスを生み出すことは、他の何物にも変えがたい体験だと思っています。私が働き始めた頃は、まだまだインターネットビジネスは余白だらけで、作るルールや体制なども自分たちの裁量で決めることができました。例えば、当時は新しい Web サービスを開発するとなると大規模な人員での開発が一般的とされていましたが、わたしたちのチームでは、ベータ開発（製品が正式リリースされる前の段階で、ユーザーに提供される開発手

法のこと）を推進し、少人数で開発に取り組んでいました。また、上司も、やりたいようにやらせてくれて、仕事という義務感を感じることなく励むことができました。その事もあって、入社当時は、プログラミングに関する知識が不足しましたが、朝起きて２時間ほど勉強をしてから出社、昼休みも勉強し、退社後も家で勉強するという、一見大変そうな生活も無理なく続けることができました。

一緒に働いている仲間も、新しい物好きな仲間が多く、他社が新しいサービスを発表すると、皆で実際に利用してみて、「サービスの裏側はこのような仕組みで動いているのではないか」と話し合いを行ったりもします。

今は法人向けのサービス提供を行っているので、人の命を預かるシステムのインフラを扱うことも有ります。シビアな部分もありますが、そこに自分たちが一部として支えとなっていることは、社会人としての責任を感じますし、やりがいでもあります。

また、今までは自分が楽しいと思えることが仕事をする上で大切でしたが、マネジメントを行う役職に変わったことで、共に働く仲間が楽しいと思える環境を整備しなければならないという責任感を伴うようなりました。チームマネジメントを行う上で、学生時代に専攻した心理学の知識は活かせているのかもしれません。

今のお仕事に興味を持ったきっかけ

私がちょうど学生時代の頃に Windows95 が発売され、インターネットの隆盛期の中で育ってきました。インターネットの登場によって、少しずつ変わっていく日々の中で、社会人になったら、インターネットを使って新しいものを生み出す仕事をしたいな、と漠然としていながらも思い、就職活動を行いました。

当時は、まだまだ IT 企業の新卒採用は少なかったのですが、今の会社の前身であるニフティ株式会社にご縁があって入社しました。この思いは今も変わらず、自分で作ったものを世界に発信していきたい、という思いがキャリアの軸となり続けています。

IT 企業における海外とのやりとり

クラウドサービスのみならず、IT業界全体の流れとして、ここ 50 年間は西洋、特にアメリカ中心の産業です。我々がクラウドを構成するソフトウェアなども海外から輸入したものを用いて構成し、サービスを提供しています。私自身も海外出張は数十回経験していますし、現地へ赴くことがなくても外資系のソフトウェア会社の責任者と会議を行うこともあります。

自分自身が特別な能力や、変わった経歴を持っているから、海外企業とやり取りをしているかと言われれば、全くそんな事はありません。青山学院大学の皆さんには商社や外交に関わる方だけが海外とやりとりをする仕事なのではなく、様々な業種・業界で海外とのやりとりは存在していることを知ってもらえると嬉しいです。

△インタビュー中の様子

海外とのお仕事で気をつけていること

どの国籍の方であっても、一対一で目の前の方と会話している、という気持ちを忘れないように気をつけています。日頃ビジネスを行う中で、他国の方とのやりとりでは、文化の違いなどによる考え方のスケールの違いは存在しています。しかし、だからといって「この方はこの国出身だから」と、ステレオタイプで区切ってしまうと、その方自身との本質的な会話が難しくなってしまうことも事実です。ですので、私は国としての風土としての話とその人との会話は、切り分けることを心がけています。そうしていけば、私が今まで出会ってきた人との類似点が見つかり、その方ならではの接し方がわかってきます。

将来的に実現したいこと

今日のクラウドサービス全般として言えることですが、Amazon や Microsoft を始めとした外資系の勢いがまだまだ強いです。私の担当サービスですと、今現在は、海外進出を行う、日系企業向けのサービス提供が多いですが、ゆくゆくは世界中で使われるサービスを開発していきたいと考えています。海外旅行に行った時に、息子に「あの海外企業のシステムは、パパのコンピュータが動かしているんだよ」と言えるようになりたいですね。

学生時代について

高校生の頃から本や映画が好きで、文学部への進学を決めました。大学という特別なアセットを活かすには、実験が必要である心理学が特に将来の役に立つのではないかと思い、専攻しました。

課外活動としては、映画研究部に所属し、自分たちでお金を出し合って、衣装作りやカメラ購入を行い、映画を制作していました。また、インカレサークルにも所属して、クラブなどを貸し切って行ったイベントの際には VJ（ビデオジョッキー：クラブなどで DJ ブースの後ろにあるスクリーンに流れる映像演出）の映像制作などもやっていました。

また、今でこそ映像編集は家庭用のパソコンでも行えるようになりましたが、当時は高級なパソコンでないと、難しかったので数十万円するパソコンを、友だち同士でお金を出し合って購入し、ウェブページや映像の制作などのアルバイトをしていました。まだまだウェブサイトや映像制作は一般的なものではなかったので、良いアルバイトになりました。

もし学生時代に戻れるとしたら

学生生活における選択の場面で、リスクをもっと選択してみても良かったかもしれません。友だちとお金を折半してパソコンを購入した経験は、私にとって一つのエポックメイキングになりました。今振り返っても、その挑戦は未来の自分に対する投資であると思っていて、それがあるからこそ、今の自分がいると言っても過言ではないと思っています。

リスクと一つに言っても、会社を興してみることや、留学経験など様々だと思います。当時の私も、留学を考えた時期がありましたが、せっかく趣味の似通った大学の友だちと、卒業が一年ずれてしまうことが嫌で、決断に至りませんでした。ですが、実際社会に出てしまえば、一年程度ずれていようが大きなことではありません。また、インターネットが普及した今日において、大学のみならず人とつながる手段はいくらでもあります。まずは、勇気を持って一歩踏み出してみることが大切です。

青学生としての強みについて

私自身、同じ青山学院大学出身の方とビジネスをする機会がありますが、青学生は「青学生らしさ」という大学の個性が際立つ人はそこまで多くありません。どちらかというと、大学名らしさよりも「その人らしさ」という個性を大事にしている方が多いと思っています。ですので大学時代には、やってみたいと思うことを、なにかの理由をつけて制限してしまうことだけは避けたほうがいいと思います。学生時代という、時間の余裕がある時期だからこそ、やりたいと思ったことはまず取り組んでみる、自分から動き出してみるという意志力を大切にしてほしいですし、その行動があなたらしさを生み出す源泉になると思います。

△富士通クラウドテクノロジーズのオフィスにて

学生へのメッセージ

青山学院大学に入学できている時点で、社会全体を見たときに、皆さんの基礎的な能力は高い位置にあるということに、ある程度の自信を持ってもらっていいと思います。

また、青学というアセットをもっと戦略的に、活かしていくことが大切だと思います。私自身、振り返ってみると、学生の頃はあまり勉強に対して熱心に取り組んできませんでしたが（笑）、青山学院には、特定分野の第一人者や、業界内の著名人である教授陣など、優秀な方がたくさん在籍していらっしゃいます。
その方々とのふれあいを通じて、4 年間でどれだけ自分自身を高めていけるかが大切です。

これは卒業してから気づいたことなのですが、大学では沢山のプロジェクトが実施されており、学生は参加する機会は沢山用意されています。そういった日頃の授業とはまた違った環境に、積極的に参加してみることで、得た知識や友人関係は社会人になっても、価値のあるものになると思います。

■浜中慶さん　PROFILE

青山学院大学文学部心理学科卒業。2003 年、ニフティ株式会社入社。WEB サービスの企画職をスタートに、デザイン制作職、システム開発職を経てクラウド事業部を担当。クラウドインフラ部マネージャー、部長などを歴任。2017 年から富士通クラウドテクノロジーズ株式会社　経営戦略室室長として、経営理念の策定から全社の業務整理まで会社の立ち上げに携わる。2018 年からは、クラウドインフラ本部の副本部長として事業戦略を担務。

富士通クラウドテクノロジーズについて

1986 年に設立されたニフティ株式会社を前身として、2017 年 4 月に同社のＢtoＢ事業を継承する形でスタート。2010 年に本格的なパブリッククラウドサービス「ニフティクラウド」の提供開始以来、クラウドコンピューティング事業に注力。国産クラウドでは第一位の顧客件数を誇る。

OB･OG へのインタビュー記事⑤

数十年後の自分のために、後悔のない選択をしてください

アクセンチュア
スペシャリスト
菱沼　阿連さん
社会情報学部　社会情報学科卒

現在の仕事について

私は現在、アクセンチュア株式会社にて、IT スペシャリストという役職についています。具体的な業務内容としては、クライアントが抱える IT に関する課題に対して、ソリューションの提案から、実際にシステムの構築や保守運用まで請け負うこともあります。私個人としては、オフショア開発（システム開発などの業務を海外企業、または海外の現地法人などに委託する開発手法のこと）にも力を入れている会社なので、自分のように英語やタガログ語が話せる人材を大いに役立ててもらえるのは、やりがいも感じられ、働いていて楽しい会社でもあります。

菱沼さんの専門について

私の場合、ブリッジエンジニアとして、主にインフラ領域を専門に、大規模システムの開発や運用保守を行っています。お客さんや上司とはもちろん日本語でお話しますが、オフショア開発の際の主な使用言語は、英語とタガログ語です。これは、私がもともとフィリピンと日本のハーフということもあり、フィリピンで生活をしていたことがきっかけになります。

チームリーダーとして日本のクライアントからの要件をまとめ、現在は７名のフィリピン人とコラボレーションをして、仕事に取り組んでいます。人件費を安く抑えられるという点で、オフショア開発には利点がありますが、反対に言語の問題や、リモート拠点とどう協働していくかという点で、ブリッジエンジニアとしての

腕が試されます。

海外と行う仕事の難しさについて

海外と行う仕事には多くの難しい課題も存在します。そのうちの 1 つに「文化の違い」が挙げられます。例えば、日本では良いアウトプットをまで残業もいとわないという精神が根付いています。暗黙の了解で、残業するようなこともしばしばありますが、フィリピンの人たちは時間内で終わらなかったら、残業してまで終わらせようと思うことはほとんどありません。

フィリピンでは、そもそも人生において、仕事というものに対してはそれほど重きをおいていないので、もしも家族が体調不良であれば、家庭を優先して仕事を休む人もいます。システムを 24 時間の保守運用が必要な場合、欠員がでてしまうと、致命的な状況に陥ることがあるので、それをどのようにマネジメントしなければならないかは課題ですね。

私は、万が一のことがあっても、日本側のメンバーだけである程度のカバーできる仕事や定型化された作業に絞って海外メンバーにお仕事をお願いしています。日本側のメンバーにもちろん負担が偏るので、オフショア比率をあげていくにはどうしていけばいいのかという点がこれからの課題になっていきます。

現在の仕事に興味を持ったきっかけ

私は、フィリピンと日本のハーフで、小学 3・4 年生の時期をフィリピンで過ごしました。その経験があって、フィリピンの言葉や文化を理解しています。そのため、将来どんな仕事をしたいか考えた時に、フィリピンと日本とどっちでも活躍できる仕事に就きたいと考えていました。また、小学校の頃からパソコンが大好きで、ゲームやウェブサービスを作ったりしていて、社会情報学部で情報工学の知識も身につけられたので、外資系の IT 企業に入りたいと思っていました。

アクセンチュアに出会ったきっかけは、留学帰国生向けのイベントです。大学 4 年間のうちの 1 年間、大学の交換留学制度を使ってアメリカへ留学し、コンピューターサイエンスを専攻していました。帰国したのが、4 年生の 7 月で、完全に就職活動に遅れを取ってしまいました。もう 1 年間、学生を続けるか悩みましたが、留学帰国生向けの就活イベントがあることを知り、参加したことでアクセンチュアに出会い、選考を受けた結果、無事内定をもらえたので、今に至ります。

△フィリピンでの仕事時の写真

今の仕事の魅力

自分の持っている、言語スキルとプログラミングの技術を、最大限に活かせる職場である点だと思います。学生の頃、将来のことを考えた時に、言語スキルを活かして、貿易関係の仕事で商談や通訳を行う人になるか、エンジニアとして、プロフェッショナルになるかで悩みましたが、結局、どちらかに寄ることが出来ませんでした。どちらのスキルも活かせる仕事がないかと思った時に、やりたかったことが全てできる場所がこの会社でした。

実際に働いてみると、最初は周りの人が優秀な人ばかりで、圧倒的なレベルの差を感じさせられましたが、その環境が自分の成長を促してくれたように思います。現在、3 年目にして仕事に慣れ始めてきていますが、慣れてきたことに危機感を感じています。今後、新たなプロジェクトに携わることで、更に成長を遂げたいと思います。

学生時代について

学生時代は、とにかく勉強一筋でした。入学したときから留学を考えていたので、留学に向けてお金を貯めながら、良い成績をとるための勉強ばかりの毎日でした。大学で提供されている、留学準備講座に向けての勉強のため、週末に青山キャンパスで勉強することもありました。得意科目が英語と情報だったので、社会情報学部の授業は、好きなものをずっとやるという感覚でした。

将来的に実現したいこと

この会社に入る前から持ち続けている、フィリピンと日本の架け橋になりたいという目標を更に実現していきたいと思います。これは今現在、IT を用いて、日本に向けてはフィリピンの労働力を活用していますし、フィリピンに向けては給料の高い仕事を提供しているので、一役買えているのではと思います。これを今後も加速させていきたいです。ですが今後、フィリピンの人件費が高くなっていき、オフショア開発の委託先としては、あまり使われなくなることが予想されています。今の会社で、私の役目を終えたな、と思った時が来たら、独立してフィリピンと日本の新しいビジネスを作り出せれば良いな、と考えています。なので、日頃からビジネスの仕方を学ぼうという姿勢で、仕事に取り組むようにしています。

もし学部生時代に戻れるとしたら

当時と同じ様に過ごすのではないか、と思います。カリフォルニア州立大学への交換留学など、他の人が経験していないことをしてきたと思いますし、学費を払った以上、最大限にできることをやってきたと思うからです。強いて言うなら、学生中はサークルにまったく参加していなかったので、参加するかもしれません。

△中国・大連出張時の写真

学生へのメッセージ

学生の時期は、皆さんとても進路に悩むことだと思いますが、パッと決めて終わらせようとする人が多いように思います。しかし、今後数十年間働き続けるかもしれないことを、かんたんに決めてしまうことは、とても乱暴なことであり、もったいないように感じています。大学の 4 年間は長いようで短いので、やってみたいことがあれば、大学を休学しようが、もう一年学生の時期を伸ばそうが、やったほうが良いと思います。それが留学であれ、なんであれ、才能がないと思ってもやってみるべきです。挑戦し

なければこの先、数十年間働き続ける上で、その後悔がいつまでも残り続けるかもしれないからです。それが、いざ挑戦してみることで、できるようになると大きく違ってくると思います。常に先のことを見据えて、後悔の残らないように過ごしてほしいと思います。

また、大学生の間は授業をつまらなく、意味の内容に思えるかもしれません。ですが、実際しっかり聞いてみると、すべての授業でとても大切なことを言っていて、とても面白いです。この経験をぜひ、社会情報学部の皆さんに体験してほしいです。

△プロジェクトメンバーとの打ち上げの様子

■菱沼阿連さん　PROFILE

青山学院大学社会情報学部社会情報学科を2017年卒業。大学では宮治ゼミに所属し、ネットワーク情報システムについて学ぶ。青山学院大学在学中に、交換留学で1年間カリフォルニア州立大学に通った。専攻は情報工学。学生時代から、プログラミングと言語学習が好きだった。現職は、インフラエンジニアとして主に大規模システムの設計、開発、運用保守、クラウド移行などに携わる。ネットワーク・データベース周りからサーバ上のミドルウェアまでのレイヤーを主に担当してきた。基盤領域の主担当として、案件をもつことが多い。

カリフォルニア州立大学について

1965年創立。カリフォルニア州民へ教育を還元する目的で設立された州立大学で、同州サンバーナーディノに立地する。サンバーナーディノは治安のよい郊外の住宅地で、かつてはネイティブアメリカン（インディアン）の居住地があったことで有名。ロサンゼルスに車で約1時間、冬はスキー場まで1時間以内でアクセスできるなどレジャーには事欠かない。州民は授業料免除というシステムのため、学生の年齢層や人種は多種多様。

（引用元：https://www.ryugaku.ne.jp/search/data?scid=1100849）

アクセンチュアについて

アクセンチュア（Accenture）は、アイルランドに本拠を置く、総合コンサルティング会社。世界55カ国、200都市以上に拠点を構え、様々な分野・産業に対して、「ストラテジー」、「コンサルティング」、「デジタル」、「テクノロジー」、「オペレーション」の5つの領域で幅広いサービスとソリューションを提供し、課題解決の支援を行う。若手から、成長できる環境が整備されており、同社を卒業したコンサルタントの多くが、起業家として活躍している。日本法人は、1995年に設立され、2019年9月1日時点で、従業員数は約13,000人に登る（公式ページより）。
2019 年に発表された、キャリタス就活による、就職希望ランキングでは、「大学院生・文系」部門で、首位を獲得するなど、コンサルティング業界の中でも、就活における人気が近年高まっている。

OB・OG へのインタビュー記事⑥

学部の枠組みを超えた、さまざまな人との出会いを大切に

慶應義塾大学大学院 経営管理研究科
経営管理専攻（2020 年卒業予定）
2020 年春より日産自動車 入社予定

生田 智暉さん

社会情報学部 社会情報学科卒

学部生時代について

私は高校時代を通じて理系だったのですが、海外文化にもなじみがあったので、大学生になったら英語も学びたいと考え、文系・理系の両方を幅広くも学ぶことができる社会情報学部へ進学しました。在学中は、情報分野の授業と様々なことが学べる青山スタンダード科目を集中的に履修し、国際分野については独学で学習しました。サークルは、海外渡航研究会、理工弓道部、アウトドア愛好会の 3 団体に所属し、幅広く活動をしていました。

また、2 年次には 6 週間の短期留学を行うなど、興味のあることにはとにかく取り組んでみることにしていました。

留学を決めたきっかけ

私は、大学 2 年次の春休みに、アメリカのサンディエゴにある語学学校で、6 週間の短期留学を経験しました。理由は、今現在の自分の英語力を試してみたいという思いからです。きっかけは、国際センターを通して、留学生チューターを担当した事でした。このチューターは留学生の生活に関する全面的なサポートを行うというもので、具体的には留学生に日本語を教えたり、携帯電話の契約に付き添ったりすることもありました。その中で、国際政治経済学部などの英語を非常に得意とするチューター達と接する機会があり、自分の英語力に課題を感じました。そこで、1 年かけて集中的に英語を独学で

学習し、その集大成として留学をする決意をしました。

実際に留学をしてみて

実際、アメリカという国は人種の坩堝と呼ばれていることもあり、様々な人と出会うことが出来ました。その中で、留学中に出会ったサウジアラビア人に「ランドクルーザーは世界一の車だよ」と言われたことと、アメリカという世界一の経済大国で日本車が沢山走っている姿を目にしたことは、非常に印象的な出来事でした。英語力は言うまでもなく身につきましたが、何よりも自信と度胸が身につきました。

帰国後、英語力を形として残す為に、TOEIC900点を目指して 3 か月間集中的に学習を行い、無事達成することが出来ました。

今の自分の考え方を形づくったという意味で、この留学はとてもいい経験になりました。

△卒業旅行で訪れたブルガリアにて

院進学を決めたきっかけ

私は、3 年次の 4 月から就職活動をはじめました。しかし、11 月頃に体調を崩してしまい入院、翌年の 5 月に退院しました。就職活動に遅れを取ってしまったために、あえて留年するか、留学をするか、院へ進学するかという選択に迫られました。熟慮の末、社会人になる前に、更に経営に関するスキルを身につける事こそがこのピンチをチャンスに変えられると考え、ビジネススクールへの進学を決意しました。その中で、一番チャレンジングな環境である慶應義塾大学の大学院へ進学を決意しました。

大学院について

マーケティングや会計学、財務など企業を経営するにあたって必要とされるスキルを、幅広く学ぶ事ができるカリキュラムになっています。ビジネススクールと言うと、社会人経験者と新卒学生でコースを分けられることも少なくないのですが、慶應義塾大学のビジネススクールでは、7 割を占める社会人経験者と新卒学生が共に学びます。新卒学生も、半分が留学生、もう半分が学部卒という構成になっています。各人が経営者目線で日々議論を行い、経営学について学びを深めます。弁護士や薬剤師、銀行員など、様々なバックグラウンドを持った人と出会い、議論することで様々な価値観に触れて吸収することができます。

その中で社会人経験者よりもビジネス経験や知識が圧倒的に不足していた為に、入学した当初は、周りとの圧倒的な実力差を感じてしまいました。入学直後に合宿が実施されるのですが、あまりにも辛くて 5 日間で 4 キロも痩せてしまいました。そこで、授業前に予習を徹底し、周りに遅れを取らないように心がけていくことで、少しずつ環境になれることができました。学びたかったことが学べているので、この進学という選択は間違

いでなかったと今では断言できます。

内定先に興味を持つことになった理由

今まで海外旅行で 25 カ国以上訪れてきましたが、日本車が世界中で走っていることに、非常に驚かされました。また、留学中に出会ったサウジアラビア人から、「日本車は世界一だよ！良い製品を作るから日本が大好きだよ！」と言ってもらえた経験があります。この経験から、自動車こそが日本が世界に誇るものであると強く認識しました。それを世界中へ拡げていくことで、世界中の人々の生活の質を上げると同時に、私が出会ったような“日本ファン”を増やしたいと思い、自動車業界に興味を持つようになりました。自動車業界の中でも、日産自動車は電気自動車を始めとした先進技術に力を入れており、外資系の要素も強い点に魅力を感じて志望しました。

将来的に実現したいこと

世界中に目を向けてみると、まだまだ生活の質が高いと言えない地域がたくさんあります。それらの地域に、日本車を普及させる事で解決の手助けを行いたいです。自動車の普及によって、個人の生活の質が向上し、社会貢献に繋がると考えています。また、その人たちが日本車を通じて日本ファンになってくれることで、別の日本製品を買ってくれたり、日本に訪れたりしてくれる事に繋がり、更に日本を好きになってもらうことが出来ます。この様なサイクルが出来れば、海外にとどまらず日本社会への貢献にもなります。そのきっかけが日産車であればいいなと考えています。

また、プライベートでは、街で困っている様子の外国人観光客がいれば、自分から積極的に話しかけるようにしています。少しでも日本という国に対して、良い印象を持って帰ってほしいからです。これも社会貢献の1つであると考えてます。

もし学部生時代に戻れるとしたら

色々なことに積極的に挑戦、経験するようにしてきたので、これと言って大きな後悔はありませんが、もっと本を読むかもしれません。学部時代は、全く本を読むことが有りませんでしたが、大学院へ進学してから本を読むようになり、色々学びになることが多いなと思うようになりました。様々なバックグラウンドの人の価値観や考え方に触れることができるビジネススクールの特徴と近いと思います。

△卒業旅行で訪れたニューヨークにて

自身で思う人生の分岐点について

中学 2 年生の時に、家族旅行で訪れた板門店（韓国と北朝鮮の朝鮮戦争停戦のための軍事境界線上にある地区）を訪れたことは、大きな経験になったと思います。以前から存在は知っていましたが、いざ現地へ足を運んで、自分の目で見てみると、言葉では表すことのできない雰囲気を感じ、同じ民族同士が 50 年以上、争い合っている現実について深く考えさせられました。そして、直接自分の目で確かめることで得られる、気づきや学びを外の世界へ行くことでもっ

ともっと得たいと思うようになりました。また、高校 2 年生の時に、修学旅行で行ったマレーシアで、現地の大学生と話すことを通じて、英語を使ってコミュニケーションをとることの面白さを学べたことも、今の自分に、大きく影響を与えたといえるかもしれません。

△アイスランドにて

学生へのメッセージ

とにかく色々なことに挑戦し、経験をしてみてください！一見役に立たないと思えることでも、その経験が必ず血となり肉となるはずです。就職活動の時に、趣味でもアルバイトでも、これだけは自分の中で誇れる、というものがあれば自信につなげることができます。

同じ学部の人だけでなく、他学部や他大学、バイト先など様々な人と出会い、話すチャンスが学部時代にはたくさん転がっていると思うので、その機会を大切にしてほしいです。色々な価値観に触れていくことが大切だと思います。

また、英語学習は、どの仕事に就いても必ず活かすことができるので、学んでおいて損はありません。様々な学習方法がありますが、個人的には“楽しみながら学ぶ“というやり方をおすすめしたいです。

私の場合は、観賞が趣味でもある海外ドラマを使って、学習を進めました。具体的には、日本語の字幕で出てきた文章を自分なりに英語に直してみて、実際の音声と聴き比べるという学習を続けていました。実際、英語力は伸びたので、効果があったのではないかと思っています。社会情報学部の掲げている、「幅広く活躍できる人材」になるには、英語力は必須だと思うので、英語学習の機会を無駄にしないでほしいです。

そして、もし海外に少しでも興味があれば、現地に行ってみることを、大切にしてほしいです。そこで、あなたの人生を変える様な意外なきっかけに出会うことができるかもしれません。

■生田智暉さん　PROFILE

青山学院大学社会情報学部社会情報学科を 18 年に卒業。18 年 4 月に、慶應義塾大学大学院経営管理研究科へ進学。経営学を専攻。20 年に卒業し春より日産自動車入社予定。
学部生時代は、村田ゼミに所属し、英語学習者のための英会話支援システムについて研究を行う。今までに 25 か国以上の海外旅行をしてきた。趣味は海外渡航や海外ドラマ鑑賞など海外文化に触れることが好き。

■慶應ビジネススクールについて

1962 年に創立された、日本で最も歴史のあるビジネススクール。「ケースメソッド」と呼ばれる、自らの考えを積極的に発信し、討論する双方向型の授業方法を用いることで、実践的な経営能力の養成を目指している。学生と社会人のコース区分が無く、社会人から新卒まで、さまざまなバックグラウンドや国籍を持った同期と、学習を進めていく点が特徴。

国際機関で働くには

先輩のインタビューで、”国際的な活躍”は多岐にわたることが、わかったのではないでしょうか。

では、その中でも、国際機関で働くには、どんなステップを踏む必要があるのでしょうか。

始めの大きなきっかけとなるのが、「インターンシップ」です。このセクションでは、インターンシップとは何かという導入から、日本からポジション応募で利用できる制度等をご紹介します。

インターンシップとは？

インターンシップとは、一言で言い表すと「就業体験」です。実際に就業する前に、インターンシップを通じて、現場で実務体験をしてみることで、業界や職種、仕事のイメージや理解を深めることが出来ます。日本の就職活動においては、大学 3 年生の夏ごろから冬にかけて実施されることが多いです。

一般企業とは異なり、国際機関では、「職務経験」が求められるケースが多い、世界中から応募が殺到するといった理由から、新卒で採用を目指すことは困難を極めます。国際機関で働く日本人職員の方の多くは、NGO や民間企業での勤務を経験されてから、国連に入られる方が多いです。そのため、学生のうちから国際機関の職務体験ができるインターンシップは、非常に有効な方法です。

国際機関でインターンシップをするには？

では、国際機関でインターンシップを行うにはどうすればよいのでしょうか？

まずは、情報収集から始まります。詳細な募集要項は各国際機関のウェブページにて、まとめられていますが、外務省の国際機関人事センターのウェブページでは、各機関のインターン情報がまとめて掲載されています。ウェブページを確認すると、多くが大学院生を対象に募集していることがわかりますが、一部には、学部生でも応募ができるものもあります（右表参照）。また、定められている期間や条件などは、それぞれの機関で異なるため、注意が必要です。また、これは国際機関のインターンシップに限った話ではないですが、多くのインターンシップは「無給」であるため、それにかかる交通費等は、全て学生の自己負担となる点も留意する必要があります。

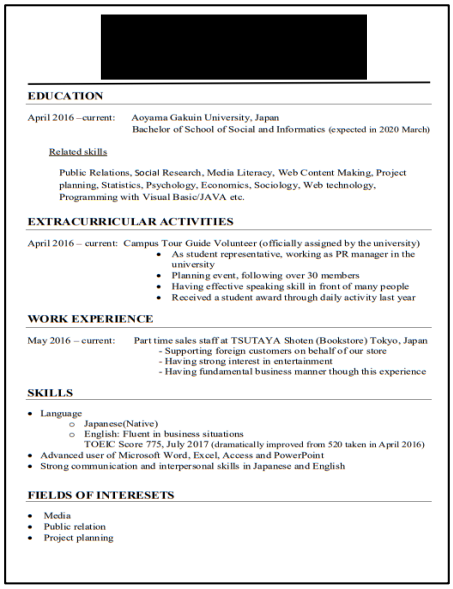
表　インターンシップ・プログラムの概要（外務省国際機関人事センターより一部抜粋）

略称	国際機関	期間	経費	応募資格	募集期間
UNICEF	国連児童基金	6 週間～26 週間	一部手当てがある事務所もあり。	・学部生 ・修士課程在籍中 ・博士課程在籍中 ・18 歳以上または学部・修士・博士卒業後 2 年以内	
UNIDO	国連工業開発機関	3-6 か月（最短1か月、最長 12 か月）	自己負担	・学部生 ・修士卒業後 1 年以内 ・21 歳～35 歳	随時
WHO	世界保健機関	6 週間-6 か月	自己負担	・学部生（20 歳以上、最低満 3 年在籍） ・院生（修士課程、博士課程）	1～6 月 7～12 月

※表の内容は、最新の情報ではない可能性があります。最新情報は、ご自身でご確認ください。

応募資格を満たしていることを確認したら、次に応募を行います。応募方法は各機関で異なりますが、多くの場合、機関へ英文履歴書を電子メールで送付することとなります。英文履歴書は日本の一般的な履歴書とは、形式などが大きく異なるため、作成に向けた準備が必要です。

右図は、私が実際に応募した際に、作成した履歴書です。内容はすべて英語で記述しています。大きな違いとして、日本語の履歴書は志望動機などを事細かに記述しますが、英文の場合は、過去の実績や、身につけたスキルについてを中心に記述します。この履歴書では、社会情報学部での多岐にわたる分野の学習で、様々なスキルを身につけたことや、外部の活動を通して得たスキルをアピールしています。


[redacted]

EDUCATION

April 2016 – current: Aoyama Gakuin University, Japan
Bachelor of School of Social and Informatics (expected in 2020 March)

Related skills

Public Relations, Social Research, Media Literacy, Web Content Making, Project planning, Statistics, Psychology, Economics, Sociology, Web technology, Programming with Visual Basic/JAVA etc.

EXTRACURRICULAR ACTIVITIES

April 2016 – current: Campus Tour Guide Volunteer (officially assigned by the university)
- As student representative, working as PR manager in the university
- Planning event, following over 30 members
- Having effective speaking skill in front of many people
- Received a student award through daily activity last year

WORK EXPERIENCE

May 2016 – current: Part time sales staff at TSUTAYA Shoten (Bookstore) Tokyo, Japan
- Supporting foreign customers on behalf of our store
- Having strong interest in entertainment
- Having fundamental business manner though this experience

SKILLS

- Language
  - Japanese(Native)
  - English: Fluent in business situations
    TOEIC Score 775, July 2017 (dramatically improved from 520 taken in April 2016)
- Advanced user of Microsoft Word, Excel, Access and PowerPoint
- Strong communication and interpersonal skills in Japanese and English

FIELDS OF INTERESETS

- Media
- Public relation
- Project planning

図．実際に作成した英文履歴書

その他、カバーレターと呼ばれる、添え状も必要です。これは、担当者に向けた挨拶やお礼を伝えるためのものになります。また、同封した履歴書に興味を持ってもらうための、アピールをするという意味合いもあります。これらは、念入りな準備が必要となるので、書籍やネットなどで十分に情報を集めること

が大切です。

「インターンシップをするには、ハードルが高すぎて、私には無理だ…」と思った方もいるかもしれませんが、その他にも、学生を対象とした国際機関職員ガイダンスが、国際機関人事センター主催で実施されています。中には、国連職員の方がスピーカーとして講演されるものもあります。そういったきっかけが、あなたの将来的なキャリアに、大きな影響を与えるかもしれないので、少しでも興味があれば参加してみてください。

国際機関で働くには？

日本人が、国際機関職員になるには、主に①空席広告、②JPO 派遣制度、③YPP の3つの手段があります。各制度で年齢制限や実務経験、学歴等が細かく取り決められているので、細かくチェックする必要があります。

①空席公告

各国際機関が、転任やポスト新設によって欠員が生じた場合に募集を行うものです。多くは、各国際機関のウェブサイトに空席公告が掲載されますが、国際機関人事センターでも同様の内容をまとめて掲載しています。各機関で定められた応募用紙を入手し、作成した上で、オンライン上で応募を行います。

②JPO（ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー）派遣制度

外務省が、将来的に国際機関で働く正規職員を志望する若手の日本人を対象に、派遣にかかる費用を負担し、一定期間各機関へ職員として派遣し、派遣期間終了後に国際機関で正規ポストを獲得し、将来にわたって正規職員として勤務していくために、必要な知識や経験を積む機会を提供する目的で実施される制度です。国連関係機関の日本人職員 850 人中 395 人が JPO 経験者です（2017 年末時点）。派遣先は、外務省が派遣取り決めを結んでいる機関になります。

③YPP（ヤング・プロフェッショナル・プログラム）

国連事務局が実施する YPP は、国連事務局が若手職員を採用するために行われるプログラムです。年一度、試験が実施され、試験に合格してポストをオファーされた者が、2 年間の勤務を経て、勤務成績が優秀であれば引き続き採用されるという仕組みです。募集職種や試験対象国が毎年異なるため、応募に際しては注意が必要となります。

詳細は、国連事務局ウェブサイトに掲載されています。

国際機関で働く上で求められる資質

国際機関の活動内容はそれぞれの機関ごとに異なりますが、各国からの分担金で成り立っており、地球規模の課題を解決し、より良い社会を築いていこうという共通の目的があります。そのため、常に世界情勢に目を向け、自分の専門性を高め続けるために学び続ける姿勢、グローバルな視点で、地球を良くしたいという思いを持つことが必要とされます。

また、実際に現地で仕事をすることもあるため、海外生活を苦に感じず、発展途上国の厳しい環境においても、適応する能力も必要であると言えます。

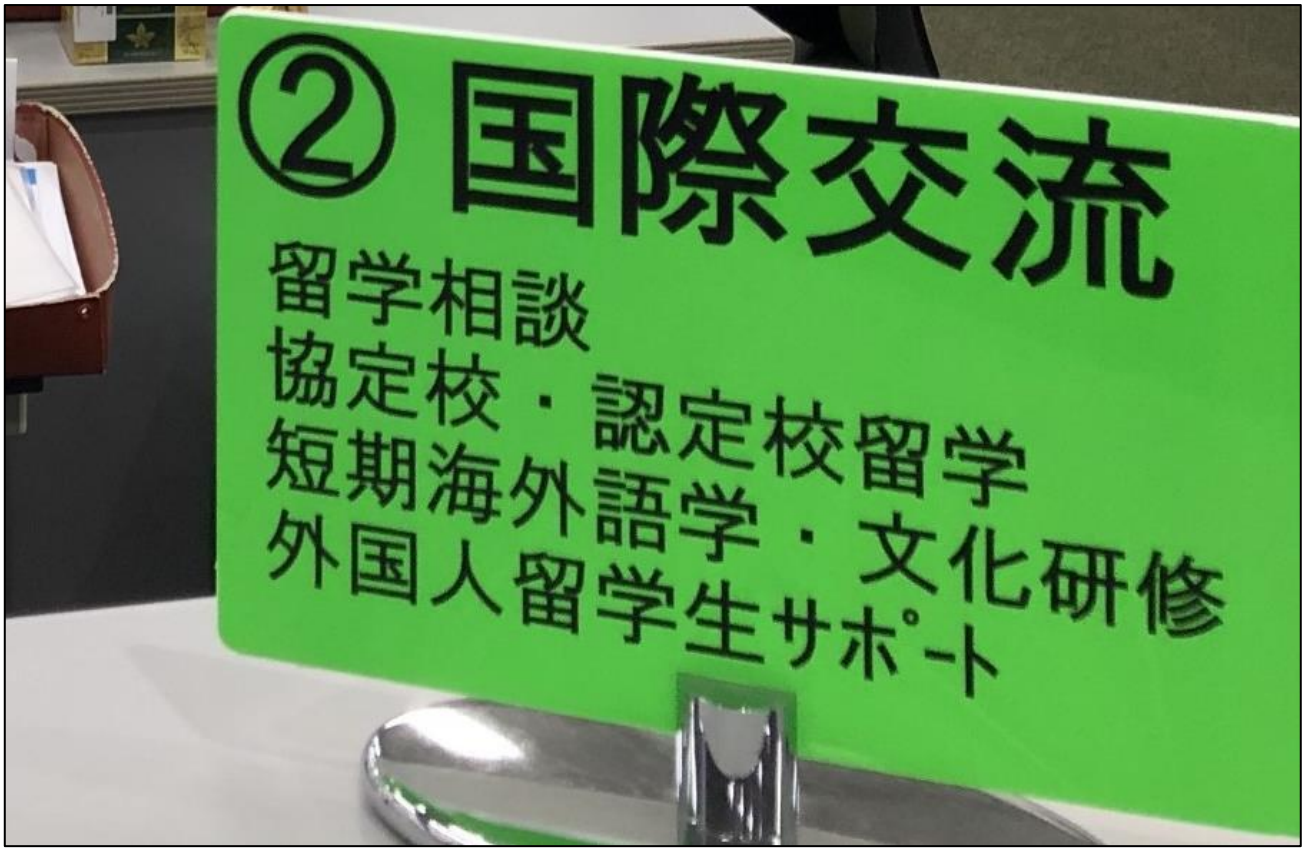
まとめ

国際機関でインターンシップをするための、実際に仕事をするためのファーストステップを紹介しました。もちろん、国際機関で仕事するには、英語力やその他に優れたスキルが必要とされます。これらは、一朝一夕で済む話ではないので、早いタイミングから自分のキャリアについて考え、学生のうちから計画的に行動をすることが大切です。

また、こういった情報は広く一般に発信されるものではないので、自分で積極的に情報収集を行うことが大切になります。今回、このパンフレットで触れた内容は、ごく一部の情報になるので詳細な情報は、外務省の国際機関人事センターや各国際機関のウェブサイト等をご確認下さい（J-BINGO プロジェクトのテキストでも紹介しています →5ページ）。

国際センターについて

大学生活の４年間で留学を考える学生も少なくないはず。
そこで頼りになるのが、Ｂ棟１階スチューデントセンター内にある、「国際センター」です。
具体的にどんな留学プログラムが提供されているか等、職員の方にお伺いしてみました。



国際センターの役割について

国際センターでは、大きく2つの役割を担っています。海外からの留学生の受け入れ業務と、本学の学生の留学先への送り出し業務です。1つ目の受け入れ業務では、海外から本学へ留学してきた学生の、日本での生活や履修登録についてのサポートを行っています。2つ目の送り出し業務では、留学を考えている学生との相談、どんな留学プログラムが提供できるのかのご案内、留学決定後のオリエンテーションの実施や帰国までのサポートなど、全面的な支援を行っています。また、留学校や留学に関する資料が揃っているので、留学に向けた計画を練ることができます。

留学プログラムの内容について

留学は、長期留学と短期留学に分けることができます。長期留学は、協定校派遣プログラムと、認定校留学の2つです。この留学では、留学期間が在学期間に参入されるので、留学先で履修した単位を本学の卒業要件単位として認定することができます。短期留学プログラムは、春期・夏期休暇期間を活かして、語学研修や文化研修が可能です。語学能力が求められることがなく、留学の経験がない学生にとって参加しやすい、というメリットがあります。また、青山スタンダード科目として単位認定が可能です。

留学を申し込む際の国際センターとサポート業者の違いって？

国際センターから申し込んでいただくと、留学までの複雑な手続きから帰国までのサポート（出発前オリエンテーション等）があります。また、留学を考えるうえで大きなポイントとなる、単位の認定が可能です。学生はまとまって出発するので、初めての人にとっては、安心感もあります。

一方で、留学サポート事業者を通して留学を行った場合は、留学に関すること全てが自己責任となってしまい、契約や、やり取りはすべてご自身で行ってもらうこととなります。

留学だけが全てじゃない!?国際交流

留学は貴重な経験になりますが、留学費用や期間など、考えなければならない問題もあります。様々な事情で留学が難しくても、国際センターが開催しているチャットルームやコーヒーミーティングに参加してみることでも良い機会になるかもしれません。その他にも、一般学生と留学生との交流を目的とした外国人留学生チューター制度などもあります。詳しくは、国際センターまでお問い合わせください。

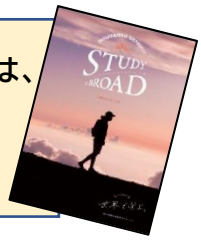
留学を考えている学生に向けて

留学の手続きには、決められた期限があるので、何よりも早め早めの行動が大切です。また、費用がかかるものなので、自分の目的（外国語のスキルを磨きたい、国際的な視野を広げたい等）を明確にすることで多岐にわたるプログラムの中から、自分にあったプログラムを見つける必要があります。また、プログラムの内容によっては、出願時に求められる資格が存在する場合もあるので、念入りな計画準備が必要です。

ご担当頂いた五十嵐さんよりメッセージ

私も学生時代に、短期留学でロシアとアイルランドへの留学を経験しました。住み慣れた日本を離れて全く異なる文化に触れることで、私自身の成長につながったと思っています。また,数年経った今でも連絡を取り合う友だちが出来ました。この経験を学生の間にできたことは、とても大きいと思っています。
興味があればぜひ、気軽に国際センターに足を運んでみてください！

協定校や留学体験談など詳細情報は、国際センターで配布している最新のガイドブックをチェック！



国際センターホームページ

http://web.iec.aoyama.ac.jp /

青山学院チャットルーム

http://web.iec.aoyama.ac.jp/chatroom/top

国際センターについて（青山・相模原共通）

■開室時間
月～金　9:00～11:30／12:30～17:00
土　　9:00～11:30

※内容は執筆時点でのものであり、変更になる場合があります。

終わりに

今回、２０１９年４月から、約１年かけて、このパンフレット制作を行ってきました。清水の舞台から飛び降りる勢いで、3 年次から参加したこのプロジェクトでしたが、振り返ってみてみると、本当に密の濃い 2 年間だったように思います。

今回のインタビュー調査のみならず、様々な人と出会い、お話をお伺いした皆さんが、自分の仕事に対して、日頃からどれだけ情熱を持って取り組まれているかを、身を持って感じることが出来、勝手ながらも、将来はこんな社会人として活躍できればいいな、とこの春からの社会人になる自分に向けて大きな活力となりました。そして、社会人はあくまで通過点に過ぎず、これからが本番であるということを改めて感じました。

また、今回、調査をしてみて意外にも盲点だったこととして、「今のご時世、どの仕事・職種においても、海外との繋がりが存在する」という点です。特に 2020 年は、東京オリンピックが実施され、今より日本という国が、外国人観光客から注目され、外国人と接する機会が増えていくことが予想されます。どんなことでも、勇気を出して一歩踏み出してみることで、今までとは違った景色が見え、自分自身の世界が大きく変わり、チャンスが巡ってくるということは今回のインタビュー調査を通して得た、大きな気づきでした。

皆さんには、まだまだ学生として残された時間が残っているはずです。このパンフレットを読んでくれた社会情報学部の学生の一人でも多くが、自己実現のために行動をしてくだされば、これほど嬉しいことはありません。

2020 年 1 月 20 日

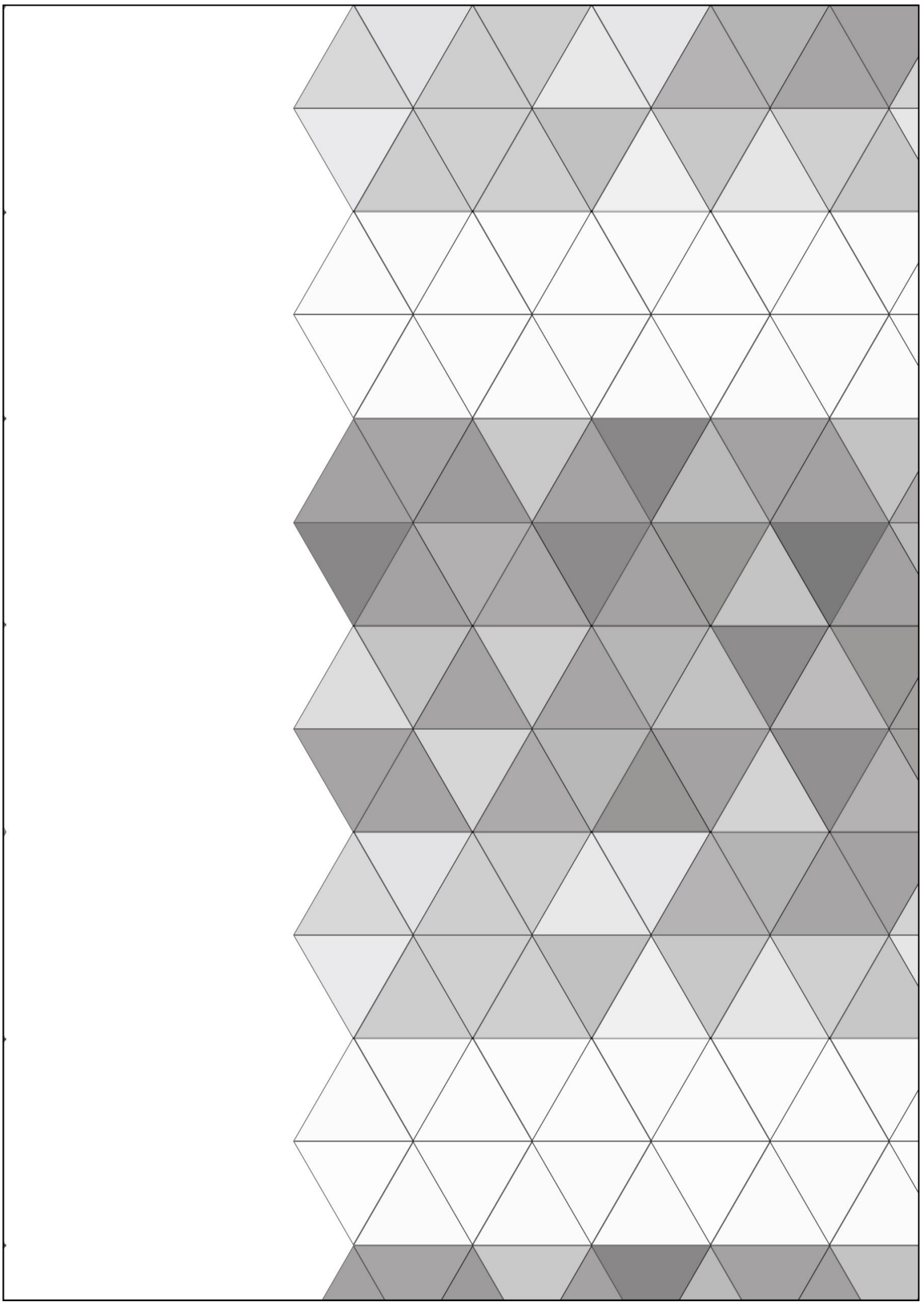
謝辞

　このパンフレットの制作にあたり実施した「国際的に活躍する青山学院大学 OB・OG へのインタビュー調査」では、IMF 国際通貨基金 アジア太平洋地域事務所の鴨志田拓也様、外務省の島根玲子様、富士通クラウドテクノロジーズ株式会社の浜中慶様、アクセンチュア株式会社の菱沼阿連様、慶応義塾大学大学院の生田智暉様に、ご協力いただきました。また、留学プログラムの紹介では、相模原キャンパス国際センターの五十嵐様にご協力いただきました。調査の実施にご協力いただきました皆様方に、改めて感謝申し上げます。その他、今回の調査に当たって、社会情報学部の教員の皆様に OB・OG のご紹介やパンフレットの内容に関するご助言を頂きました。

皆様方のご助言、ご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。

国際的に活躍する青山学院大学 OB・OG のキャリアについて

2020 年 3 月 19 日発行

■執筆者
青山学院大学社会情報学部 J-BINGO プロジェクト
2019 年度卒業生　橋本 光弘

■発行
青山学院大学社会情報学部 J-BINGO プロジェクト
〒252-5258 相模原市中央区淵野辺５－１０－１
TEL　０４２－７５９－６０００（代表）